

## スウェーデン大使館、北海道で公式視察

### 北国同士の共通点を背景に、グリーン・デジタル・研究協力の新たな可能性を探る

2026/3/11

2026年3月2日から8日にかけて、ヴィクトリア・リー駐日スウェーデン大使とスウェーデン大使館の代表団は、北海道を公式訪問した。札幌、江別、当別、苫小牧、稚内、旭川などを巡り、自治体、企業、研究機関との意見交換や現地視察を通じて、グリーンテクノロジー、デジタルインフラ、研究協力、地域振興など多様な分野での連携の可能性を探った。

寒冷地という自然条件、広大な自然環境、そしてそこから育まれる持続可能性への意識。スウェーデンと北海道は多くの共通点を持つ地域であり、今回の訪問は、両地域の関係をさらに深める第一歩となった。

#### 北海道の成長戦略と国際連携——経済、サステナビリティ、人材育成まで幅広く意見交換

今回の視察では、北海道の鈴木直道知事や札幌市の秋元克広市長をはじめ、自治体や経済界の関係者との対話を通じて、北海道の産業政策や地域経済の将来像について意見交換を行った。

鈴木知事との会談では、北海道が持つ食料生産力や再生可能エネルギー資源など、地域の強みを生かした持続可能な経済発展の可能性について議論が交わされた。北海道は日本でも高い食料自給率を誇り、豊かな自然資源を背景に、グリーンエネルギーや環境技術、持続可能な産業の分野で大きな潜在力を持つ地域である。こうした分野におけるスウェーデンとの協力の可能性に加え、地域経済を支える人材育成や教育、国際人材の確保についても話題が及び、大学や研究機関を含めた連携の可能性が確認された。





**Embassy of Sweden**  
Tokyo

札幌市では秋元市長を訪問し、都市政策やイノベーションを軸とした経済発展について意見交換を行った。寒冷地という共通の条件を背景に、持続可能な都市づくりやグリーン技術の活用、デジタルインフラなどの分野における協力の可能性について議論が行われた。



また、北海道経済連合会（道経連）との会談では、北海道における産業発展と国際ビジネスの展望について意見交換を実施。食、エネルギー、観光など北海道の強みを生かした産業分野において、スウェーデン企業との協力やビジネス交流の可能性が示された。



こうした議論の中では、近年注目されているデータセンターなどのデジタルインフラについても話題に上り、寒冷な気候条件や再生可能エネルギーの活用を背景に、北海道が持つ潜在的な可能性について関心が共有された。

## 北極研究での連携——北海道大学で地球規模課題への共同研究を議論

*Address:*  
Floor 16, Ark Mori Building,  
1-12-32, Akasaka, Minato-ku  
Tokyo

*Telephone:*  
+81 3 5562 5050

*E-mail:*  
ambassaden.tokyo@gov.se



札幌では北海道大学を訪問し、寶金清博総長および研究者と会談。大学が進める国際的な研究ネットワークや学際的研究について説明を受け、北極域研究を中心とした学術協力の可能性について意見交換を行った。

北海道大学は、日本における北極研究の主要拠点の一つであり、「北極域研究センター（Arctic Research Center）」を中心に、理学研究院、工学研究院、地球環境科学研究院など複数の部局が連携して研究を進めている。

北極圏を国土に持つスウェーデンでも、北極研究は国家的な研究分野の一つである。スウェーデン極地研究事務局（Swedish Polar Research Secretariat）やストックホルム大学、ウメオ大学などの研究機関が、氷河観測、海洋環境、気候モデル、北極生態系などの研究を進めており、EUの研究枠組みプログラムを通じて国際共同研究も拡大している。



気候変動の影響が世界で最も顕著に現れる地域の一つとされる北極は、科学、政策、産業の各分野で国際的な関心が高まっている。今回の訪問には、スウェーデン大使館の科学・イノベーション部も参加しており、北海道大学の研究者とともに北極域研究をめぐる最新の動向や国際的な研究連携について意見交換が行われた。研究者交流や学術協力の可能性についても議論が交わされ、今後の連携の深化への期待が示された。

## 北海道に根づくスウェーデンの技術と文化——スマート酪農から北欧住宅まで広がる交流



江別市では、スウェーデン企業デラバル（DeLaval）の搾乳ロボットが導入されている牧場「カム角山」を訪問し、スマート酪農の現場を視察した。

牛は自らロボットに歩み寄り、自分のタイミングで搾乳を受ける。こうした自動搾乳システムにより、作業の効率化だけでなく、牛にとってもストレスの少ない飼育環境が実現されている。人の働き方と動物のウェルビーイングの両立を目指す技術として、持続可能な酪農の可能性を示す取り組みとなっている。

牧場ではさらに、敷地内でバイオガスを生成して電力を自給するほか、企業から回収したコーヒーの搾りかすを牛のベッドや消臭材として再利用するなど、地域と企業が連携した循環型の取り組みも行われている。



また当別町では、北欧スタイルの住宅が立ち並ぶ「スウェーデンヒルズ」を訪問し、後藤正洋町長やスウェーデンハウス関係者と交流した。札幌から車で約 40 分の距離にありながら、まるでスウェーデンの地方都市を思わせる景観が広がるこの地域は、日瑞交流を象徴する場所として知られている。

住宅メーカーのスウェーデンハウスが手がける住宅は、高断熱・高气密といった北欧の住環境の考え方を取り入れたもの。寒冷地という共通の条件を持つ北海道において、北欧の住宅文化や暮らし方が地域の生活の中に根づいている様子を視察した。

## 半導体とデジタルインフラの拠点として注目される北海道

Address:  
Floor 16, Ark Mori Building,  
1-12-32, Akasaka, Minato-ku  
Tokyo

Telephone:  
+81 3 5562 5050

E-mail:  
ambassaden.tokyo@gov.se



千歳市では、次世代半導体の製造拠点として建設が進む Rapidus 株式会社の工場を視察した。現在建設中の「IIM-1 (Innovative Integration for Manufacturing)」は、2 ナノメートル世代の先端ロジック半導体の量産を目指す施設で、日本の半導体産業の競争力強化や AI 技術の発展、経済安全保障の観点からも大きな注目を集めているプロジェクトである。

こうした大規模な半導体投資は、単に製造拠点の建設にとどまらず、サプライチェーン企業、先端製造技術、研究機関、そして高度人材を引き寄せることで、地域に新たなデジタル産業のエコシステムを形成する可能性がある。北海道でも、半導体産業を核とした新しい産業集積への期待が高まっている。

視察後には、北海道庁国際局やソフトバンクでデジタルインフラを担当する関係者とともに、北海道におけるデータセンター誘致や次世代デジタルインフラについて意見交換を行った。AI やクラウドサービスの急速な発展に伴い、世界的にデータセンターの需要が拡大する中、寒冷な気候条件や再生可能エネルギー資源を持つ北海道は、データセンター立地に適した地域として国際的にも注目されている。

スウェーデンでも、寒冷な気候と安定した電力供給を背景にデータセンター産業が成長しており、国際的なテック企業のデータセンターが数多く設置されている。スウェーデン大使館科学・イノベーション部のラース・ハンマルストロム参事官は、データセンターへの投資が科学研究、イノベーション、そして経済安全保障の強化にもつながる点について紹介した。

今回の訪問では、半導体産業とデジタルインフラの発展が地域のイノベーションや産業構造にどのような影響をもたらすのかについて理解を深めるとともに、スウェーデンの経験を踏まえた国際協力の可能性について意見交換が行われた。

### **北方地域の自然とエネルギーの可能性——稚内とサロベツで学ぶ自然環境と持続可能性**

北海道最北の都市・稚内市では、工藤広市長を表敬訪問し、地域の取り組みや北方地域の特性について意見交換を行った。



日本でも有数の強風地域として知られる稚内では、風力発電をはじめとする再生可能エネルギーの導入が進んでおり、地域の自然条件を生かしたエネルギー利用の可能性について理解を深めた。また、サハリンとの歴史的なつながりなど、北方地域ならではの地理や歴史についても説明を受けた。

さらに北海道北部に広がるサロベツ湿原を訪れ、自然保護と地域の産業・暮らしがどのように共生しているのかについて触れた。サロベツ湿原は多様な植物や希少な鳥類が生息する貴重な生態系を育む地域であり、環境保全の取り組みや自然教育の活動について学ぶ機会となった。



現地では、気候変動の影響として渡り鳥の数が減少するなどの変化も観測されており、自然に最も近い場所にいるからこそ見えてくる環境変化の現実について理解を深めた。

### 最後の訪問地・旭川——地域創生と文化・スポーツがつなぐ日瑞交流

視察の最後の訪問地となった旭川地域では、文化やスポーツを通じた地域づくりと国際交流の取り組みを視察した。



旭川近郊の東川町では、世界的な椅子デザインコレクションとして知られる「織田コレクション」を展示する文化施設「WAKKA」を訪問し、デザインや文化の力を通じて地域に人を引き寄せる取り組みについて学んだ。織田コレクションは、椅子研究家の織田憲嗣氏が長年にわたり収集してきた世界各国の椅子コレクションで、北欧デザインを中心に数多くの名作家具を含むことで知られている。北欧のデザイナーの作品も多く含まれており、東川町ではこうしたデザイン資産を地域文化の発信や教育に活かしている。東川町は人口減少が続く多くの地方自治体とは異なり、人口が減っていない自治体としても注目を集めており、「過疎でも過密でもない“適疎”」という考え方のもと、写真文化やデザイン教育など文化を軸としたまちづくりが進められている。地域資源を活かした持続可能な地域づくりの好例である。



続いて、旭川で開催されたクロスカントリースキー大会「バーサロペットジャパン」に参加した。バーサロペットはスウェーデン発祥の世界最大級のクロスカントリースキー大会で、長い歴史と伝統を持つスポーツイベントである。スウェーデンと気候条件が似ていることから旭川に紹介され、長年にわたり交流が続いてきた。

大会ではヴィクトリア・リー大使が、今津寛介旭川市長とともに開会挨拶を行ったほか、スターターやメダル授与を務め、スポーツを通じた国際交流の意義を強調した。

文化、教育、スポーツといった多様な分野で続く交流は、スウェーデンと北海道の長年のつながりを象徴するものとなっている。



Embassy of Sweden  
Tokyo

## 「今回の訪問はスタート」——今後、経済・教育分野でも交流拡大へ

今回の北海道訪問は、スウェーデンと北海道の協力関係をさらに発展させるための第一歩であり、今後も経済や研究、教育などさまざまな分野で交流を深めていく予定だ。

ヴィクトリア・リー大使は今回の訪問について次のようにコメントしている。

「スウェーデンと北海道は、自然環境、気候、そして持続可能な社会を目指す価値観において多くの共通点を持っています。今回の訪問を通じて、研究、グリーンテクノロジー、デジタル分野、そして地域社会の発展において多くの協力の可能性を実感しました。今回の視察はスタートにすぎません。これからも北海道とのパートナーシップをさらに深めていきたいと考えています。」

### 本レポートに関する問い合わせ

スウェーデン大使館 戦略コミュニケーション担当官

岡村奈央/Nao Okamura

[Nao.okamura@gov.se](mailto:Nao.okamura@gov.se) / 080-4138-6415

【スウェーデン大使館ウェブサイト】

<https://www.swedenabroad.se/ja/embassies/japan-tokyo/>

【スウェーデン大使館 SNS アカウント】

Facebook <https://www.facebook.com/EmbassyofSwedenTokyo>

Instagram <https://www.instagram.com/swedenintokyo/>

X <https://x.com/EmbSweTokyo>